



2014年4月よりドイツのハイデルベルク大学 BioQuant に研究留学をさせていただいております。ハイデルベルクは、人口15万人の内3万人が学生という学問・研究都市です。研究施設としては、ドイツ最古のハイデルベルク大学（正式名称はルプレヒト・カール大学ハイデルベルク）、子宮頸癌を引き起こすパピローマウイルスを発見したノーベル賞学者ハウゼン教授のいる DKFZ（ドイツがんセンター）、DNA データベースを使用している人ならおなじみの EMBL（欧州分子生物学研究所）、マックスプランク医学研究所などがあります。世界的に有名な複数の施設が隣接して建っているのがこの地域の特徴ですが、自分の所属する BioQuant にはこれらを含む複数の施設から研究者が集まっています。そして小規模な町ですが、物理学賞なども含めると4～5人のノーベル賞受賞者がこの町にいるということです（と書いていたところ、所属する BioQuant のメンバーが「超解像蛍光顕微鏡の開発」で今年2014年のノーベル化学賞を受賞したとの連絡が入りました。また1人ノーベル賞受賞者が増えたようです）。また付近にはドイツで最も有名な城趾の一つであるハイデルベルク城、ゲーテやカントが好んで歩いたという哲学の道があります。

こちらでは病理画像を用いて最新の数理・形態解析を行っています。そのため朝から晩までプログラミングという日も珍しくありません。研究所には工学系から生物系まで多様なメンバーが揃っており、他分野の研究者とすぐにディスカッションできるため、複合領域の仕事は非常に発展しやすい環境にあります。一方、バックグラウンドが異なる研究者間には、しばしば言葉の壁以上に分野の壁が立ち上がり、渡独してすぐのディスカッションで「良性腫瘍と悪性腫瘍があり……うんぬんかんぬん……その特徴を解析したい」と内容説明を行っていたところ、「それは結局、2群に分けるという問題だね」と工学研究者からコメント

が入り、そこから先は、いかに精度良く2群に分割するかといった機械学習の手法についてのディスカッションに切り替わってしまったことがありました。自分としては比較を通して現象の理解をしたかったのですが、彼には分離精度を上げる研究と理解されたようです。どうも興味の方向性が違うらしい、でもグループとして研究するには共通のゴールが必要だ、さてどうしよう。ということで、それからはまずゴールを提示し、そのゴールにどのような価値があるのか説明することを最優先にするよう心がけています。相手の立場に立って話をすることの重要性を実感し、日々勉強しているところです。

この文章を読んで下さる方は、何らかの形で留学や海外生活に興味がある方が多いと思いますので、こちらでの生活や家族の暮らしについても少し書かせていただきます。こちらに来て驚いたのが、外国人研究者および家族に対する手厚いサポートシステムです。毎週水曜日に大学主催のワインパーティーが外国人研究者家族のために開催されており、退職された方などボランティアの方々が、毎回ケーキや軽食も準備してくれるため、リラックスした雰囲気の中で各国から来ている様々な研究者家族と語らうことができます。このパーティーにより妻や子供は友達をすぐに作る事ができました。またハイデルベルクの家賃は非常に高いのですが、大学および各研究所にはゲストハウスが完備され、外国人研究者家族は相場の約半額程度で立派な家族用住居を借りることができます。このようなサポートシステムの充実が、世界中の外国人研究者を呼び大学にさらなる活気をもたらしており、その結果としてさらに人と予算が集まるという正の連鎖が働いていると感じました。また、これら大学コミュニティにより、普段あまり接しない、法律学者、歴史学者、考古学者、心理学者、純粋数学者らとも知り合うことができ、他分野の大先輩から自分の研究分野の将来像などについて意見をもらうことができたことは、自分にとって非常に大きな収穫でした。

今回の留学およびドイツでの生活は自分にとっても家族にとっても貴重な経験であり、このような機会を下さった菅野教授、そして多忙の中送り出していただいた下条先生をはじめとする病理関係者の皆様、研究準備を手伝っていただいた皆様に心から感謝いたします。また医学科顕彰制度留学支援の対象に選んでいただいたことに、この場をお借りして感謝申し上げます。この留学で学んだ沢山のことを、帰国後できるだけ多く還元したいと思います。

(2014月10月)

(信州大学医学部病理組織学教室所属)